

原発ゼロ、自然エネルギーへの転換めざし学び、行動を



原発、放射能汚染をどうするか、自然エネルギー社会をどうつくるか。頸城区出身の五十嵐仁都立大教授による講演とシンポジウムが26日、ワークパルで行われました。200人近い人たちが参加し、とても有意義な勉強会となりました。

講演の中で五十嵐教授は、「原発震災」で明らかになった事故の規模、放射能被害の大きさと実態を報告し、「安全神話」の崩壊と「地震付き原発」の危険性を指摘するとともに、できるだけ早く「原発ゼロ」を実現することが課題となつていくとのべました。さらに、日本は自然エネルギー資源が豊富で、自然エネルギーへの転換は可能であり、必要であることを明らかにしました。

このなかで五十嵐教授は、福島第一原発の事故についてふれ、「事故は津波のせいというが、地震の揺れそのものによる損傷、液状化現象による損傷も大きい」とのべました。また、自然エネルギー、再生可能エネルギーに関連して、太陽光、中小水力、風力などだけでなく、温度差熱の利用、振動による発電にまで言及したのは驚きました。さらに「第4の革命」として挙げた環境革命論は真剣に受け止める必要があると感じました。自然エネルギーを重視して、大量消費社会の転換を図り、「地域で食料・再生可能エネルギー・介護・ケアの自給を」との訴えは、経済評論家の内橋克人さんの主張と一致しています。

結びで五十嵐教授が強調した点は3つです。1つは、政治を変えること、誤った決定をただすことです。いままでの政治が間違っていて、災害に弱いまちになっているところに大震災がやってきた。もっと強靱な対策を講じていればこんな被害が出なかったというのはその通りです。2つは、具体的な行動に出ること、立ち上がることです。「今回、放射能汚染があるから救援に行けなかった地域がある。原発がなければ命を落とさずにいた人たちがいた。インターネットなども活用して具体的な行動を」と訴えました。3つは、だまされたいのために知ること、学ぶことです。これまで原発神話にだまされてきたが、かつて伊丹万作（俳優・伊丹十三の父）が戦争責任に関して言ったように、だまされてきた側に責任がなかったのか。自分自身に問いかけてみる必要があるとのべました。さて、シンポジウムの方ですが、2人の主婦、佐藤恵美さん、橋本桂子さんと県家畜商組合理事長の萬羽博文さんの発言がすばらしかつ

た。佐藤さん、橋本さんは、主婦として原発災害にどう立ち向かおうとしているのかを明らかにしてくれました。また、萬羽さんは、放射能汚染稲ワラ問題が出て以降、風評被害で肉牛がまったく売れなくなった3か月間の苦しみを語りました。シンポはパネラーが2回ほど発言してなかなかまとめられないケースが多いのですが、今回は会場からの質問も次々と出て議論が深まりました。そして、最終的には放射能検査の徹底、正しい知識の普及に努めることの大切さなどが確認されました。

後期高齢者の人間ドッグに助成を

75歳以上の後期高齢者に対する人間ドッグ助成、肺炎球菌ワクチン接種助成についての県内自治体の実施状況がこのほどわかりました。県内30自治体のうち、糸魚川市、妙高市など10自治体で人間ドッグ助成を、見附市など5自治体で肺炎球菌ワクチン接種助成を実施しています。

上越市は、広域連合が主体となつて取組を行い、助成するような仕組をつくらないと難しいと言っています。ここはしっかりと調査して実施を迫っていきたくと思います。



（写真は新潟県福祉医療キャラバンと上越市関係課との懇談会。11月25日、橋爪が撮影）

春よ来い 第一八一回 母が嫁いだ頃のこと

思い出が刻み込まれた風景に出合うとしゃべりたくなるのでしようか。先日、吉川区の丸滝橋の近くを通ったら、尾神に嫁いだ頃の思い出話を母が堰を切ったようにたくさん語ってくれました。

母の話は丸滝橋のたもと付近で突然はじまりました。「ここは、おら、とちやと一緒に炭そって出たところだ。ここまで来ると、運送ひきをやっていた村屋の鍛冶屋（屋号）のじちやが炭俵を運んで駄賃とりしていなったんだ。炭の検査もここでやったがだ」

祖父が戦前から戦後にかけて炭焼をやっていたことは伯母などから聞いていますが、母が新婚時代に祖父を手伝っていたという話にはびっくりしました。私の祖父・音治郎はこの近くの山の上の方で炭焼をしていたのです。いまではほとんど跡形のない急な山道、二〇代の母はどんな格好をして炭俵を運んでいたのでしょうか。

丸滝橋を渡って間もなく、母の話は自分の結婚のことや私が生まれた時の話になりました。母の実家は旧旭村（現大島区）竹平です。母を嫁に欲しいと竹平に出かけたのは祖父でした。

「じちや、一人で竹平へ行って、話して決めてきなつたがねかな。そんげんがど。とちやは酒屋もんをして家にいなかった。酒屋もんの写真を見合い写真として送んなつたというでも、待っていたけど、どういうわけかその写真が届かなかつたがど……」

「ほしや、おまんどんな男だか心配だつたろ」ときくと、母はフツツと笑いました。私が生まれた頃のエピソードも初めて聞くことばかりでした。母が私を産んだのは実家です。嫁ぎ先である尾神のわが家から、母は歩いて竹平の実家に向かいます。その時、一匹の赤毛の犬が母について行ったといひます。

「どこの犬だか知らん、赤い犬がずっとついてきたがど。尾神から。ちよちよちよつと行くと小便しちや、おれについてきた。しばらく竹平にいたでも、知らんこまに帰つちやつた」その時の様子が目に見えるようです。

出産時、産婆役をしてくれた人は藤尾の「じんべい」（屋号）から吉川区上川谷の「した」（屋号）に嫁いだ文子さん。竹平の内山医院で看護師として働いていた人で、文子さんが産婆として初めてとりあげた赤ちゃんは何と私だつたといひます。

私は生まれてまもなく風邪をひいてしまひます。風邪をひいてから、当初、母親と私は行火（あんか）を抱かしてもらい別々に寝ていたのですが、ところが、まだ三月です、寒さは厳しかった。私の小さな腕は棒つきれのようになり、凍えていたといひます。内山医師が母の実家にやって来て、私の小さくて細い腕に注射を打つてくださいました。この時、一緒に来た文子さんの言葉を母は忘れていませんでした。

「おまさんの体で、親の熱であつたためてくんた方がいいがだねかね」

母が嫁いだ時、わが家ではすでに祖母は亡くなつていました。私が生まれてから、子守りの仕事は祖父が大方やってくれたといひます。特に忙しい田植え時期には、祖父は炭焼の仕事を手伝って私たち兄弟を育ててくれたそうです。「おらちのじちや、えらかつたがど。ばちや、なかつたすけ、おまんだを子守りしなつたがだ。水車のところへ行つてばちやばちやとオシメ洗つたり、納屋の下のハサ場で干したりしていなつたもんだ。まあ、子どもを背中にそつて子守りしながらよく稼いだこて」

母が思い出話をしてくれたお陰で、この日はとてもいい日になりました。

放射能汚染のない、安全な学校給食を

市議会文教経済常任委員会と放射能汚染を心配する団体のみなさんとの懇談会が11月24日、市役所で行われました。団体から参加されたみなさんは約20人で、ほとんどが女性です。



今回の懇談は放射能汚染のない安全な学校給食を願う人たちの申し入れにより実現したもの。会を代表して説明した2人からは、「日本の食べ物の基準値は甘い。比較的 안전한上越でも内部被ばくする。学校給食では、子どもたちは食べ物を選べない。汚染の心配のない食べ物を食べられるようにしていただきたい」「放射能計測器をもっと増やしてほしい。市内にはしっかりした検査をできるところもあるがお金がかかる。市から補助を出してもらえないか」などの訴えがありました。

参加者からの訴えも次々と出ました。「中学校で出てくる野菜はジャガイモ、玉ねぎなどは地元産だが、あとは地元外だった。上越の美味しいものをもっと食

べられるようにしてほしい」「住んでいる自治体で放射能対策に差が出るのは親としては切ない。しっかりとした対応を」「最初は抽出検査で大丈夫と出たが、あとで出ちやつたでは困る。できるだけ広く検査を」「チェルノブイリでの被爆の実際を知って、ほんとに怖いことを実感した。テレビではわからない。現実を知らせる努力をしていただきたい」「上越市ではヨウ素剤を保管しているというが宝の持ち腐れとならないように」。日本共産党議員団では、こうした訴えをしっかりと受け止め、12月議会の質問等に活かしていきたいと思ひます。

市の各種計画について活発な議論

いま、各区で地域協議会が開催されています。議題は市道整備など地域事業の見直しに関する諮問、公の施設の再配置計画、道路整備計画などです。

地域協議会では、「事実上、工事が終わる段階になってからの諮問では意味がない」「評価点数が低くなっているが、この（温浴）施設は地域にとっては重要な施設だ」などの声が上がっていました。（写真は吉川区地域協議会）

